

さる こ ば い せき
猿 小 場 遺 跡

都市計画道路飯田下山線建設に先立つ
埋藏文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年

長野県飯田市教育委員会

猿 小 場 遺 跡

都市計画道路飯田下山線建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年

長野県飯田市教育委員会

序

近年の考古学ブームはといわれるなかで様々な調査・報告がなされていますが、考えてみればそれだけ地域における開発等が進んでいることの裏返しだと思います。

飯田市においても公共事業や民間開発に伴う発掘調査が増大しており、先人たちの生活の様子を示す事実をつぎつぎと確認しております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが歴史となるわけです。

今回発掘調査した猿小場遺跡は、以前調査し平安時代の集落址を確認した場所の東側にあたる場所ですが、平安時代に關係する造構は確認できませんでした。しかし、中世とみられる特殊な造構の発見は、新しい歴史的資料になるものと思います。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査といえども文化遺産の破壊にちがいないのです。できることならば、今までそうだったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だと感じています。

しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。そのためにはやむをえない部分もあるとは思います。地域社会の発展と文化財保護とがうまく調和のとれた地域にすることがこれから的重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた飯田市都市計画課と、猛暑の中での発掘作業や細かい整理作業に従事していただいた作業員の皆様にこころよりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成4年3月

飯田市教育長

小林 恭之助

例　　言

1. 本書は都市計画道路飯田下山線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地猿小場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市都市計画課の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 現地での発掘調査は平成3年4月23日～6月14日まで実施し、続いて整理作業及び報告書の作成作業を飯田市考古資料館で行なった。
4. 発掘調査及び整理作業においては、遺跡名の略号SKBを用いた。
5. 本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は吉川が執筆した。なお、本文については一部小林が加筆・訂正を行なった。
7. 本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林が総括した。
8. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例 言	
目 次	
I 経 過	1
1. 発掘に至るまでの経過	1
2. 試掘調査の経過	1
3. 発掘調査の経過	1
4. 整理作業の経過	2
5. 調査組織	2
II 遺跡の環境	4
1. 自然環境	4
2. 歴史環境	4
III 調査結果	7
1. 掘立柱建物址	7
掘立柱建物址 1	
2. 溝 址	8
溝址 9 溝址 10 溝址 11 溝址 12	
3. 土 坑	11
土坑 37 土坑 38	
4. そ の 他	11
1) 柱 穴 群	11
2) 遺構外出土遺物	11
IV ま と め	16
V 参考引用文献	17

挿図目次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査範囲および遺構分布図	6
挿図 3 掘立柱建物址	7
挿図 4 溝址 9・10	9
挿図 5 溝址 11・12	10
挿図 6 土坑 37・38	11
挿図 7 掘立柱建物址 1 付近柱穴群	12
挿図 8 土坑 37 付近柱穴群	13
挿図 9 溝 11 付近柱穴群	15

図版目次

第 1 図 掘立柱建物、溝址 10 出土遺物	20
第 2 図 溝址 10 出土遺物	21
第 3 図 遺構外出土遺物	22

写真図版目次

図版 1 掘立柱建物址 1、土坑 37	24
図版 2 土坑 38、溝址 9・溝址 10	25
図版 3 溝址 11・溝址 12・土坑 37 付近柱穴群	26
図版 4 掘立柱建物址 1 出土遺物	27
図版 5 溝址 9・10 出土遺物	28
図版 6 溝址 10・11・12 出土遺物	29
図版 7 遺物外出土遺物	30
図版 8 作業風景	31

I 経 過

1. 発掘に至るまでの経過

猿小場遺跡は飯田市松尾北の原に位置している。地形的には北の原は飯田松川の河岸段丘上に発達した鼎地区の一部であると考えた方がよい。そして、この猿小場遺跡は上段と下段の間に位置する小段丘上にある。

長野県飯田長姫高等学校がこの段丘上のほぼ中央に位置し、鼎地区松尾地区の境界上に建っている。

この段丘上は水の便が良くないため、宅地化が進んだのは近年になってからで、段丘の東半分には、市営・県営の住宅が建っている。それ以前は、桑園があるのみで道路の整備も行われていなかった。現在残っている農地は西寄りに一部あるのみで果樹園が中心となっている。

近年この段丘の上段の八幡原では、市立病院の建設や一般国道153号飯田バイパスの建設が進みつつある。

以上のような、公共施設の建設および宅地化の進行に合わせて、今回都市計画道路として飯田市街地とバイパスを結ぶ飯田下山線の建設が本決りとなり、用地の取得も終了した。

建設用地内には埋蔵文化財包蔵地猿小場遺跡が所在し、隣接する飯田長姫高校用地内で実施した発掘調査においては、大規模な集落址が確認されているため、長野県教育委員会、飯田市都市計画課、および飯田市教育委員会3者の担当職員が現地において協議した結果、用地内の試掘を実施後再度協議することとした。

2. 試掘調査の経過

協議に基づき試掘調査に着手することとしたが、作物の関係で立ち入りのできない箇所があるため、2回に分けての調査になった。

1回目は路線の北半分で、平成3年4月23日に実施した。方法は重機により幅1.5mのトレンチをあけ、地下の様子を見た。その結果、段丘上を東西に走る溝を確認した為、再度協議を実施し、遺構の確認できた部分を発掘調査することにした。

2回目は南半分であり、6月12日に実施、1回目と同じ方法をとった。

3. 発掘調査の経過

試掘の結果を受けて、4月24日から表土剥ぎ、26日には作業員による遺構の検出、掘り下げを行ない、5月14日には第1次の調査を終了した。第2次調査は6月に入ってから実施したが、遺構が少なく2日間の調査で終了した。

調査区の測量は平板により実施したが、遺構については一部業者に委託した。

4. 整理作業の経過

現地での作業終了後、飯田市考古資料館において実施した。現地調査による遺構図・写真類の整理を行ない、引き続き出土遺物の水洗い・注記・復元について、それらの実測・写真撮影を実施した。

図面類・出土遺物の基礎的な整理作業終了後、遺構図・遺物の実測図のトレースに統いて、原稿執筆、図版組みを行ない、報告書の刊行となった。

5. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者	小林 正春				
調査員	吉川 豊	佐々木嘉和	佐合 英治	馬場 保之	渋谷恵美子
作業員	市瀬 長年	今村 春一	木下 傳	木下 当一	北村 重実
	庭田 多久三	坂下やすゑ	清水 三郎	高木 義治	滝上 正一
	豊橋 宇一	中平 隆雄	福沢トシ子	細田 七郎	正木実重子
	松下 成司	松下 真幸	松下 直市	松島 卓夫	森 章
	矢沢 博志	吉川 正実			
	井原 恵子	池田 幸子	大藏 样子	金井 照子	金子 裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下 早苗	木下 玲子
	梅原 勝子	小池千津子	小平不二子	小林 千枝	斎藤 徳子
	渋谷千恵子	田中 恵子	筒井千恵子	丹羽 由美	萩原 弘枝
	原沢あゆみ	樺本 宣子	平栗 陽子	福沢 育子	福沢 幸子
	牧内喜久子	牧内とし子	牧内 八代	松本 恵子	三浦 厚子
	南井 規子	宮内真理子	森 信子	森藤美智子	吉川 悅子
	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子		

(2) 事務局

飯田市教育委員会

安野 節	飯田市教育委員会社会教育課長
中井 洋一	飯田市教育委員会社会教育課文化係長
小林 正春	飯田市教育委員会社会教育課文化係
吉川 豊	"
馬場 保之	"
渋谷恵美子	"
篠田 恵	"

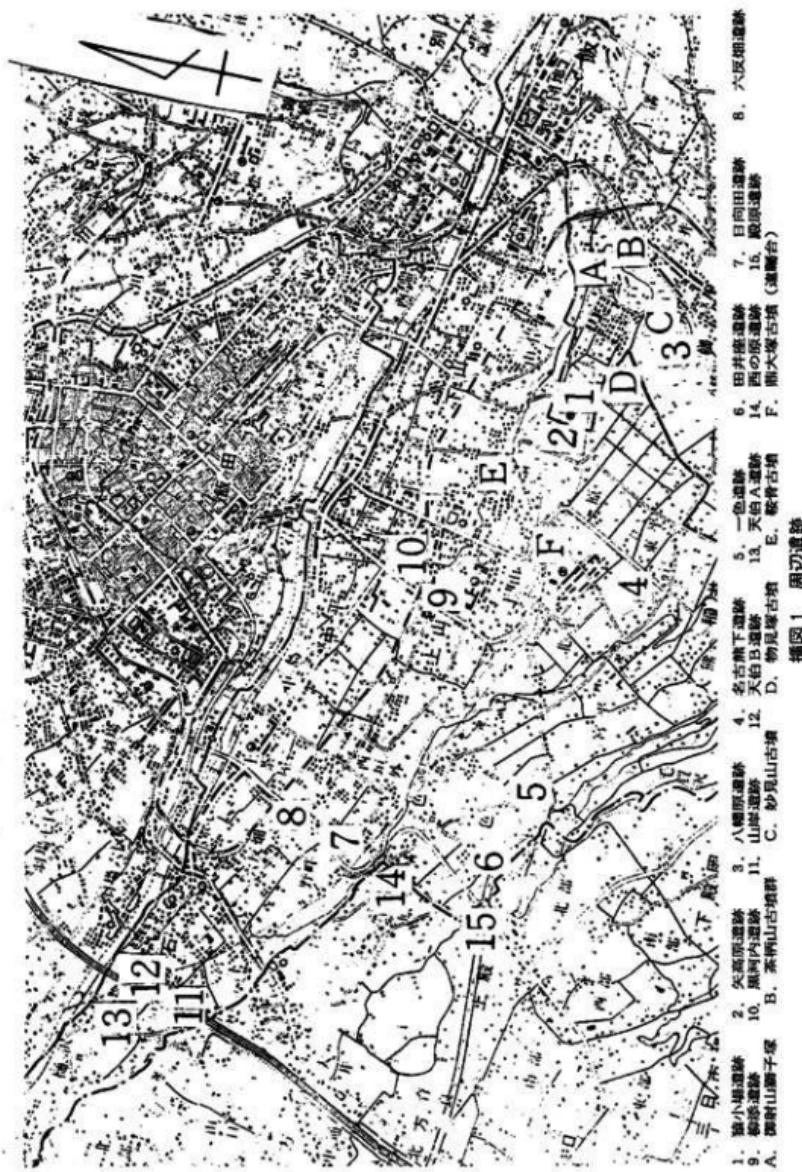


图 1 周辺道路

II 遺跡の環境

1. 自然環境

猿小場遺跡は飯田市松尾北の原（通称常盤台）に位置する。この地区は昭和59年12月の飯田市と合併した鼎名古熊と境を接しており、行政区画でいえば飯田長姫高校が境界となっている。松尾北の原地区は、地形的に見れば鼎地区の一部とも見ることができ、飯田松川の河岸段丘上にある。松川による段丘面は、大きく別けて観察すれば、一色と名古熊地区の一部のある最上段、名古熊地区のある上段、切石から上山まで続く中段および上茶屋から下山・東西鼎まで延びる下段の4段にとらえられるのが、各所に微地形による変化も見られる。

猿小場遺跡は前述の河岸段丘でいえば、上段と中段の間にある小段丘の上にある。そして、この段丘は矢高瀬訪神社の西側、鼎大塚と呼ばれている庚申塚古墳付近から始まり、緩やかに傾斜しながら東へ延び、しだいにその幅を広げ茶柄山へと続く、その先は比高約30mの段丘崖で松尾地区の下位段丘である松尾久井・八幡町の段丘面となる。

猿小場遺跡の北側は比高差約40m段丘崖で鼎地区下段となる。南側は比高差約15mで上段の八幡原となる。標高はこの段丘のほぼ中央である飯田長姫高校で466.50mを示している。

水利面では、段丘に規定された地形により、河川等からは離れ、湧水等も乏しく、高燥な土地といえる。

2. 歴史環境

松尾北の原および鼎地区は河岸段丘上に発達した場所であり、各段丘上に先人の生活した痕跡が認められている。それらを時代を追って概観してみる。

旧石器時代の遺物としては、天伯B遺跡・猿小場遺跡からナイフ形石器が、また上段にあたる八幡原遺跡では彫器が出土している。断片的な資料からではあるが、当猿小場遺跡一帯にその頃から人々の生活の跡があったといえる。

縄文時代早期は天伯A遺跡構外で押型文土器片のほかいくつかの資料が得られたが、不明な点が多い。

前期に入ると集落の実態を示す資料が得られている。田井座遺跡では竪穴式住居址を確認している。また、八幡原遺跡でも2軒の住居址を確認している。

中期としては、天伯A遺跡のほか日向田遺跡、柳添遺跡、代田遺跡等各所で良好な資料を得ている。

後期・晩期は断片的な資料を得ているのみで、遺構を伴う例はほとんどない。六反畠遺跡でも土器の出土はあったが遺構は確認できなかった。

以上、縄文時代全体を通じて鼎地区に人々の居住した痕跡があり、それは段丘上における微地形の変化と複雑に関連しあっての、人々の生活があったことを示している。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらず、湧水線を利用した水田經營と陸耕を基本としていたものと考えられる。山岸遺跡・天伯B遺跡の大集落の存在、田井座遺跡・一色遺跡・猿小場遺跡などの小規模集落の存在が知られている。

弥生時代の墓制である方形周溝墓は弥生時代の各遺跡で確認されているが、八幡原遺跡の崖縁部には、古墳時代へつながる各種の墓形態を確認した。

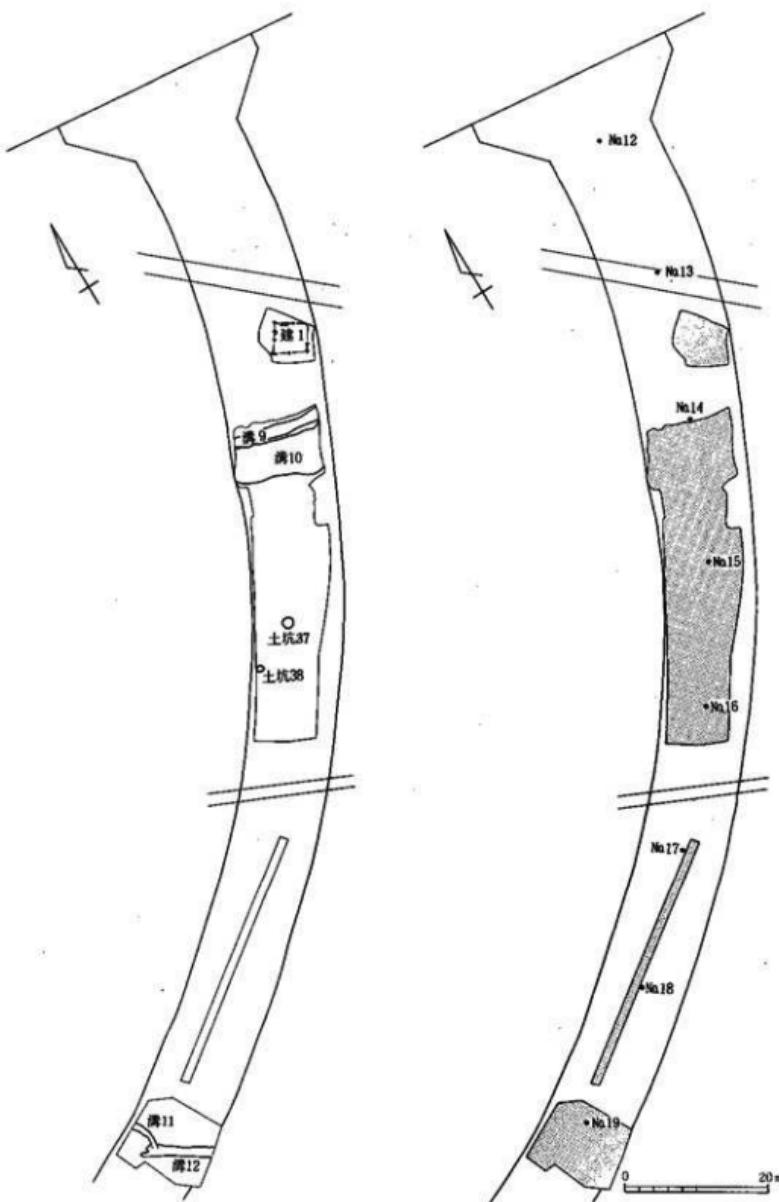
鼎地区は、飯田市全体からみれば小範囲の地区ではあるが、弥生時代の様相とすれば、伊那谷の当時の姿をすべて読み取ることができるといえる。

古墳時代は山岸遺跡・天伯B遺跡・柳添遺跡・黒河内遺跡・六反畠遺跡において集落址が調査され、当地方における古墳時代の集落の一つのありかたを示している。古墳の調査例は少ないが、本遺跡の上位段丘先端部にあたり、現在建設中の市立病院敷地内にあった物見塚古墳は、割竹形木棺を内部主体とする特殊な葬法のもので、注目される存在である。前方後円墳である御射山獅子塚があり、さらにその東方との段丘崖縁部には茶柄山古墳群の所在が知られている。また、本遺跡北側の段丘直下にあたる矢高諏訪神社の北側、矢高稲荷神社付近に横穴式石室が現存する鞍骨古墳がある。その他にも鼎地区には12基が知られているが、調査されていないため、詳細は不明である。

平安時代の遺跡としては猿小場遺跡・日向田遺跡・八幡原遺跡が調査されており、猿小場遺跡では、8世紀後半を中心に行軒の竪穴住居址が検出されている。

中世に入ると鼎に関する記録は残っていないが、この地区は伊賀良庄の一部に含まれるが、室町時代には、松尾に居を構えた小笠原氏の支配下に入ったものと思われる。名古熊諏訪神社の付近には田中館があったと伝えられることから考えて小笠原氏の繁栄の基盤をなしていったことに疑う余地はない。と同時に、鼎地区各所で中世の陶磁器が採集されることも注目したい。

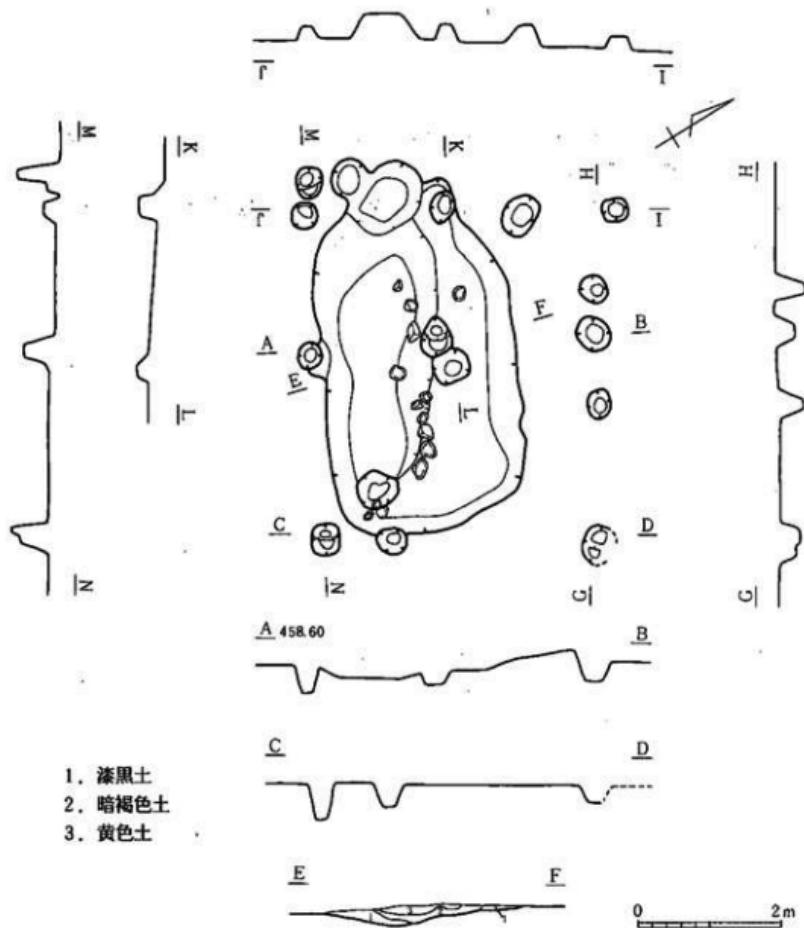
鼎地市の概要は上記のようであり、今回の調査地点はいくつかの古墳に接した場所であり、平安時代・中世の集落に隣接した地でもあり、それぞれの時代においても、なんらかの意味を持つ地であったと推測される。



插図2 調査範囲及び遺構分布図

III 調査結果

1. 堀立て柱建物址



擇図3 堀立て柱建物址 1

掘立柱建物址 1（挿図3、第1図）

調査した部分では一番起点よりのセンター杭の番号では12付近で検出した。表土剥ぎの時点では黄色土の被りが確認できた。その部分は $5.2 \times 2.8\text{cm}$ の隅丸方形であった。底部はほぼ南北に2段になっており、低い南側では検出面からの深さは20cmであり、北側は14cmとやや浅くなっているが、両側ともタカキ状に堅くしまっている。西端は直径約80cm深さ43cmの円形の穴に切られていたがこの遺構に関係するものかどうかは、判断できなかった。

その周囲にはいくつかの柱穴が確認でき、多少のずれはあるものの 2×3 間の総柱の建物址と判断した。 $4.8 \times 4.0\text{m}$ で長軸の方向は $\text{cm}63^\circ \text{ E}$ を指す。前述の落ち込みはこの建物の範囲内に含まれるため、建物の一部と考えられる。

この建物の柱穴として、確認できたのは全部で13個、いずれも平面プランで40cm前後の円形、深さも50cm前後と比較的揃っている。

覆土は土層断面でみると3層になっているが、中心は黒褐色土である。20cm前後の礫が中央にある段の部分にあったが、出土状態から見れば並べたというよりも投げ込まれたものと考えられる。

遺物としては、縄泥岩製の用途不明石器（図1図1）および花崗岩の擋石（第1図2）があるが、混入と見られる。その他に中世常滑焼の壺の破片があるが、時期の判断はこの壺一点の出土のため断定はできないが、中世の建物と考えられる。また、構造からみて、住居もしくは倉庫の可能性が強い。

2. 溝 址

溝址9（挿図4、第1図）

掘立柱建物址の西側でセンター杭13付近で検出した、ほぼ西から東に延びる幅1.6mの溝址である。東西とも用地外に延びているものと見られる。西隣には溝址10が平行して確認された。調査できた部分は全長12m、幅は一定であるが、深さは西の用地境付近で50cm一方の東では72cmとなる。ほぼ中央に高低差9cmの段がある。壁は比較的急角度に立ち上がっている。溝中の覆土は全体が暗褐色土および砂、砂利が互層となり、水流があったと判断される。

遺物としては石器のみで、打製石斧（第1図3・4）、横刃形石器（第1図5）がある。

溝址10（挿図4、第1・2図）

溝址9の南側で平行する格好で検出した。幅は西の用地境で4.8mであるが、東の用地境では6.0mと広がる。深さは75cm前後とほぼ一定である。溝址中の覆土は砂利・泥が互層となっており、底部の中央付近には水流による凹凸がある。壁は南側で全体が2段になるのに対し、北側では一部段をもつ部分がある。

覆土からの遺物の出土は比較的多い。土器としては、半分破損した耳栓（第1図6）、長胴

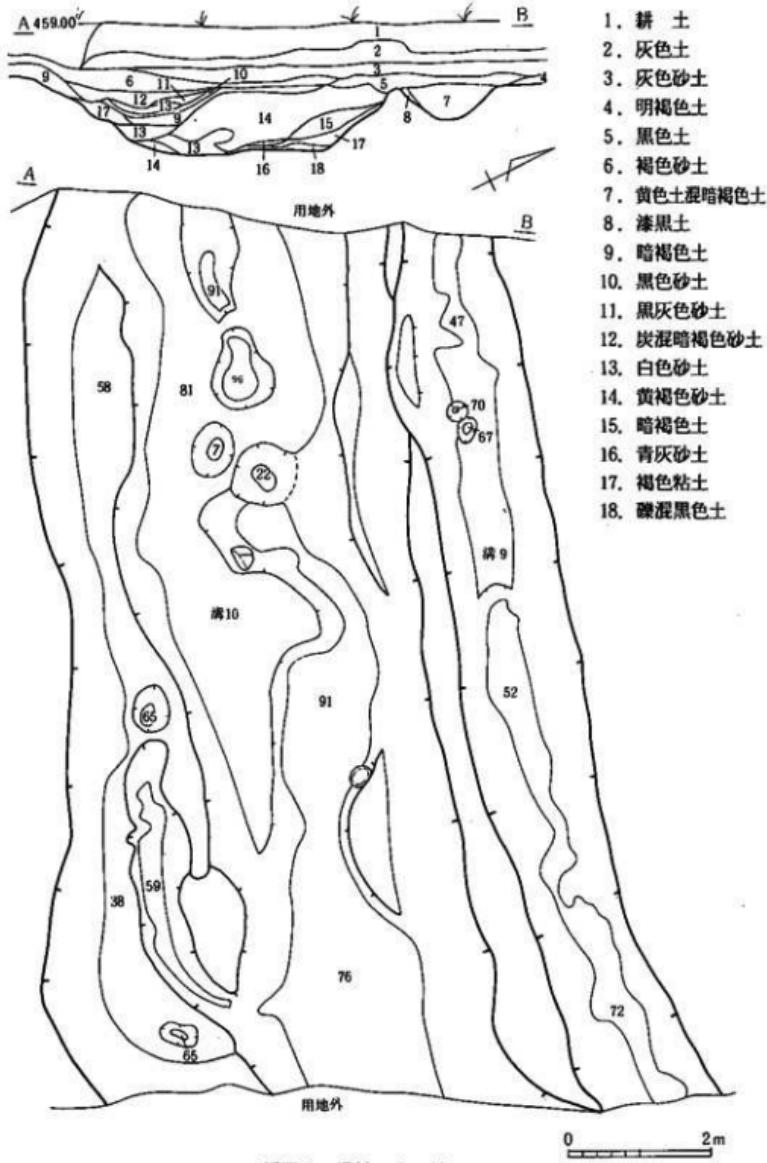


図4 溝址 9+10

の壺の口縁部のみ（第1図7）、須恵器の坏（第1図8）、および灰釉陶器の碗（第1図9・10）は比較的残存部が大きかった。その他には、土師器、須恵器や灰釉陶器の小破片がある。また、中世の壺の破片も出土している。石器としては、硬砂岩製の打製石斧（第2図1～5）、横刃形石器（第2図6～9）等がある。

双方の溝とも一部のみの調査ではあるため、詳しいことはわからないが、砂の堆積状態から判断すれば、かなりの水流があったと判断される。双方の溝の方向は段丘面を段丘崖に平行しており、通常の姿で自然水流が流れたとは考えにくく、最初は人為的に溝を掘ったものと考えたほうが説明しやすい。ただ、その時期の特定できない。

溝址11（挿図5）

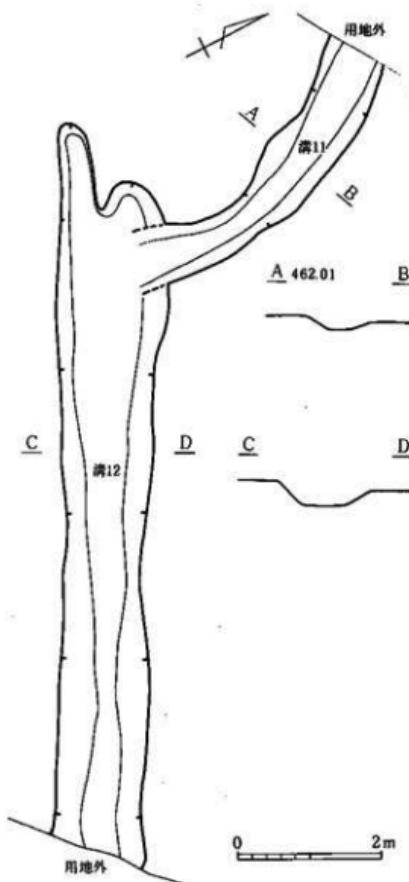
2次調査区で確認したものである。北側は用地外に延びるがセンター杭19付近では溝址12に切られるため、全長5m、幅1m、深さ10cmである。底には凸凹があるが、水の流れ痕跡は認められない。

漆黒土の覆土からは近代と見られる擂鉢片以外の遺物の出土はなく、時期・性格とともに不明である。

溝址12（挿図5）

やはり、2次調査区で確認したものである。東西に延びる溝址であるが、東側は用地外に続き、10mほど西へ直ぐ伸び、消滅する。幅は1.5mでほぼ一定、深さは30cm前後と比較的しっかりした掘り込みであるが、溝址11を切る部分の西側では7cmとごく浅くなる。

漆黒土の覆土であるが、遺物は近代と見られる陶器片以外の出土はなく、溝址ではなく耕作による攪乱とも考えられる。

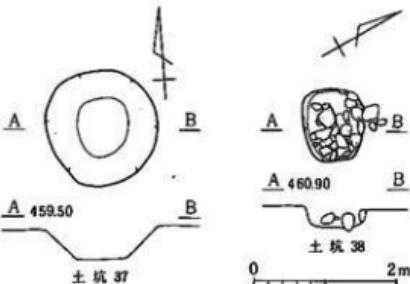


3. 土 坑

土坑37（挿図6）

センター杭35付近で検出した、直径1.6mの円形の土坑である。底は中央がやや窪んでおり最深部で60cmを測る。壁は比較的急角度に掘られているが、壁には地山の礫が露出する部分がある。

漆黒色の覆土には、比較的大きな礫と中世のものと見られる常滑焼の壺片が出土している。



挿図6 土坑37・38

土坑38（挿図6）

土坑37の西で検出した。一部が用地外にかかったが完掘した。1.0×0.8mの梢円形をした土坑である。中には大小様々な礫がはいっており、底の状態まではつかめなかった。深さは27cmで壁は急角度に掘り込んである。

この部分は地山の礫層が上部まであがってきているが、石の入り具合からみると人為的に石を投げ込んだ可能性もある。

覆土は暗褐色であったが、遺物の出土はなく、時期・性格とも不明である。

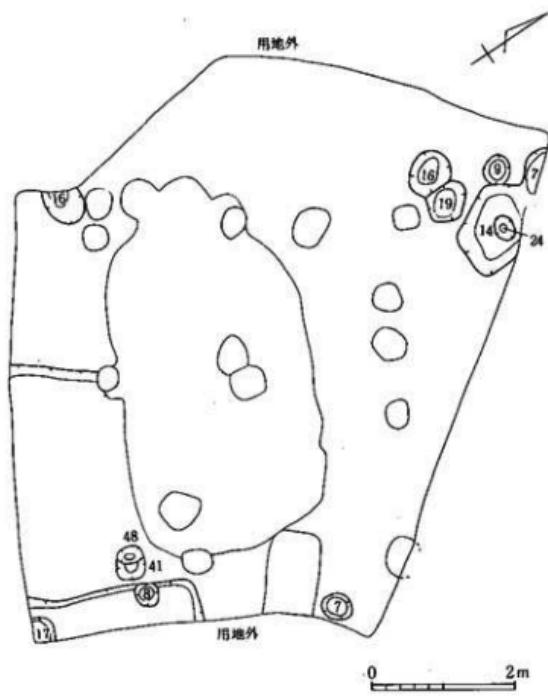
4. そ の 他

1) 柱 穴 群（挿図7・8・9）

調査区全域で柱穴を確認した。平面形、規模、覆土等に統一感がなく建物址とはならないものと判断した。これらの中には耕作による攢乱なども確認できるが、ひとつずつの性格や時期の判断は困難である。

2) 遺構外出土遺物（第3図）

前述の遺構に伴わない遺物の出土はごくわずかである。土師器・須恵器・陶磁器類の小破片がある。中世の常滑焼きの壺にはタキがみられ（第3図1）、青磁、近世陶器と時代的にはバラエティーに富んでいる。石器の数は少ないが、硬砂岩製の横刃形石器（第3図2・3）、砥石（第3図4）が建物址付近の柱穴から出土している。



挿図7 堀立柱建物址1付近柱穴群

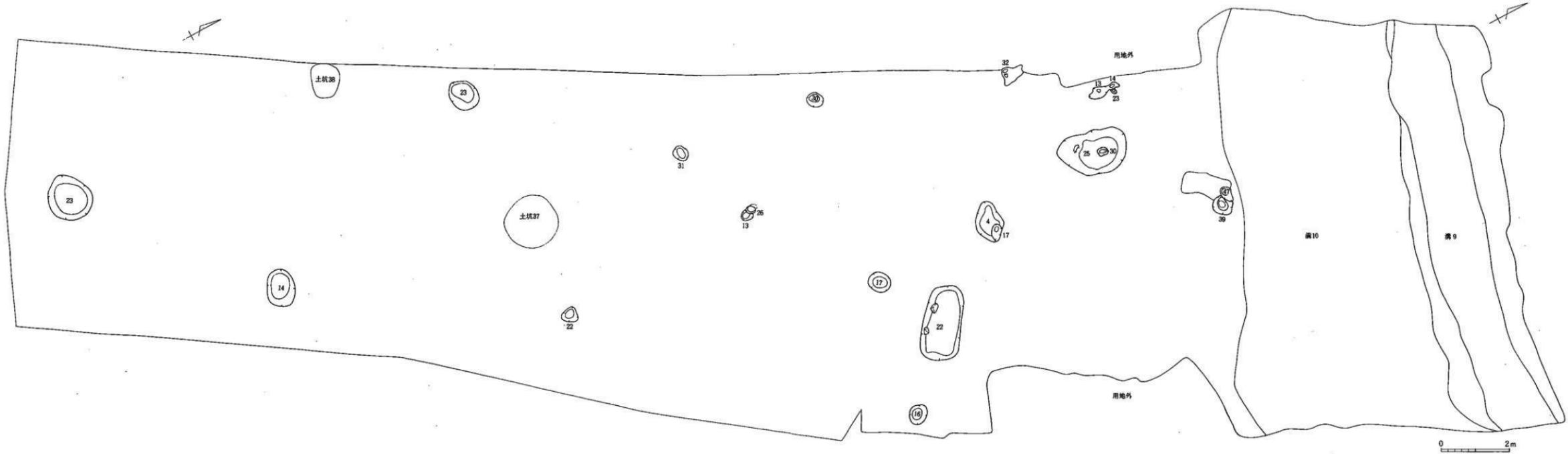
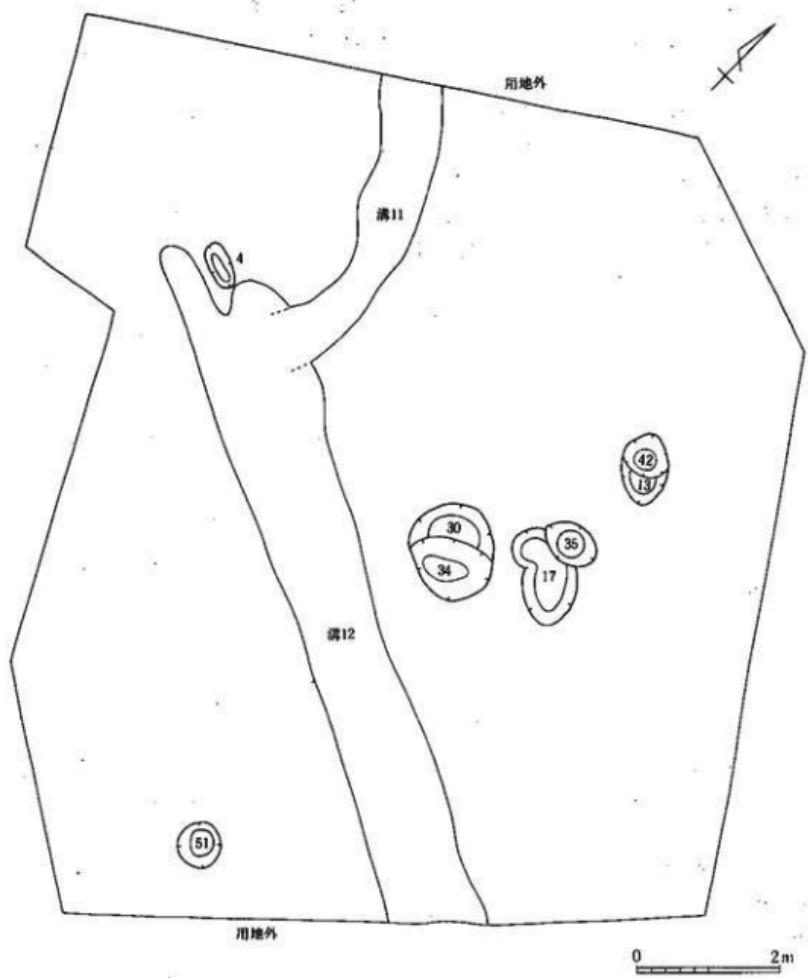


插图 8 土坑37付近柱穴群



挿図9 溝11付近柱穴群

IV ま　と　め

今回の調査結果は以上のとおりであるが、調査対象が道路敷内と限られた範囲のみであり、断片的な事実を知り得たのみといえるため、遺跡の総体については周辺一帯を含めた考察が必要である。

今回の調査地点からわずか西へ寄った箇所にあたる長野県長姫高等学校建設に先立つ猿小場遺跡発掘調査において平安時代の集落址が確認された。しかし、本地点では平安時代の住居址は確認できず集落の範囲から外れているものと判断できた。

時代的には中世と見られる建物址を1軒確認した、その形態が総柱とはいえ小規模であり、土間的な箇所を有す特徴がある。当時の一般的な住居がどんなものであるかは不明な点もあり、その性格・用途等の特定は困難ではあるが、この建物址は構造上から判断すれば、倉庫か物置のようなものである可能性が高い。仮に倉庫とすれば、倉庫が1軒単独で存在するとは考えにくく、住居かまた同じような倉庫が近くに存在する可能性が強い。

さらに、段丘面を段丘崖に平行に流れる2本の溝の存在である。中位の段丘であるこの地点では通常の水流は段丘面を段丘崖に向かって流れるのが通常である。長野県長姫高等学校建設に先立つ猿小場遺跡発掘調査において確認した溝もその例にもれていません。しかし今回の調査では2本が西から東に向かって水流が認められた。なんらかの理由で人為的に溝を掘り込み水を引いたものと考えられる。溝の覆土は、小石混じりの砂が中心であるが、一時期掘んだ事を示す細かい砂のみの堆積がある。遺物をみれば、最も新しいものでも灰釉陶器であり、時期的には中世より古い可能性が強い。

この地点で確認した土坑にからは、中世常滑焼大甕の破片が出土しており、中世集落の一画を成していたといえる。

遺構外出土の遺物は中世・近代のものがあるが少量出土しており付近にそれらの時代に関するなんらかの遺構の存在が考えられる。

猿小場遺跡の主体は、現在の飯田長姫高校の敷地内にあるといえ、今回の調査地点は、平安時代集落の範囲外であり、中世においては集落範囲内ではあるが、その東側の外縁寄りにあたると考えられる。

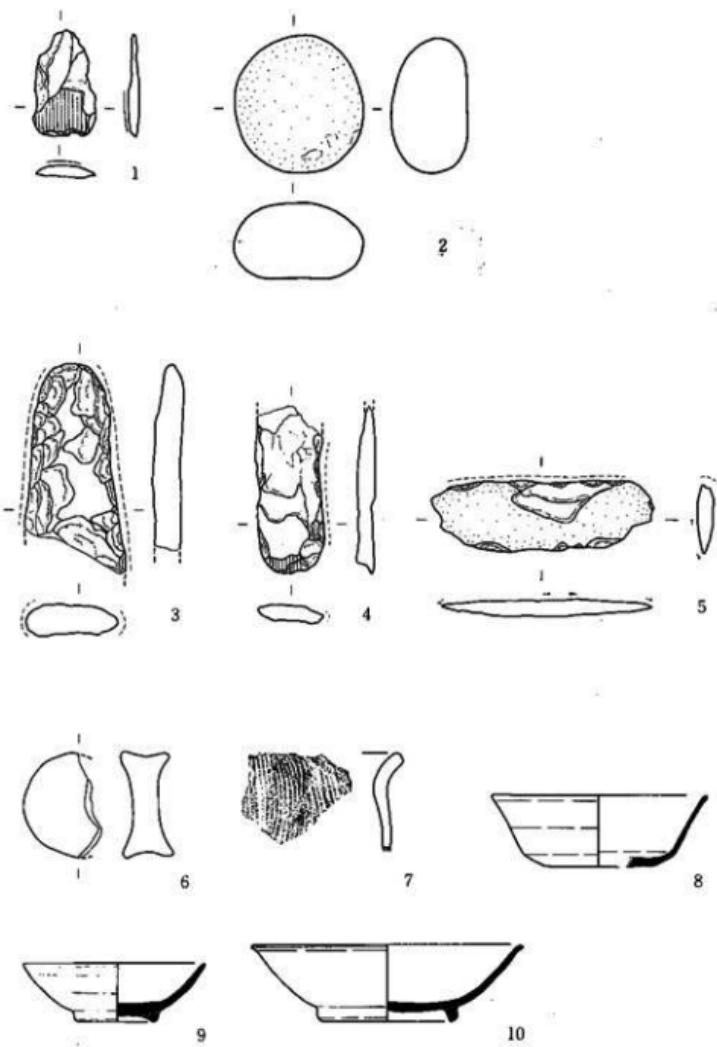
以上、今回の調査に関連して、現段階におけるいくつかの推定を行なったが、遺跡全体の具体的な姿は、周辺部の発掘調査等による事実の集積が不可欠であり、今後に課せられた課題は多大である。

最後になりましたが、文化財保護に深いご理解とご協力をいただいた関係者の皆様に感謝の意を表する次第です。

V 引用参考文献

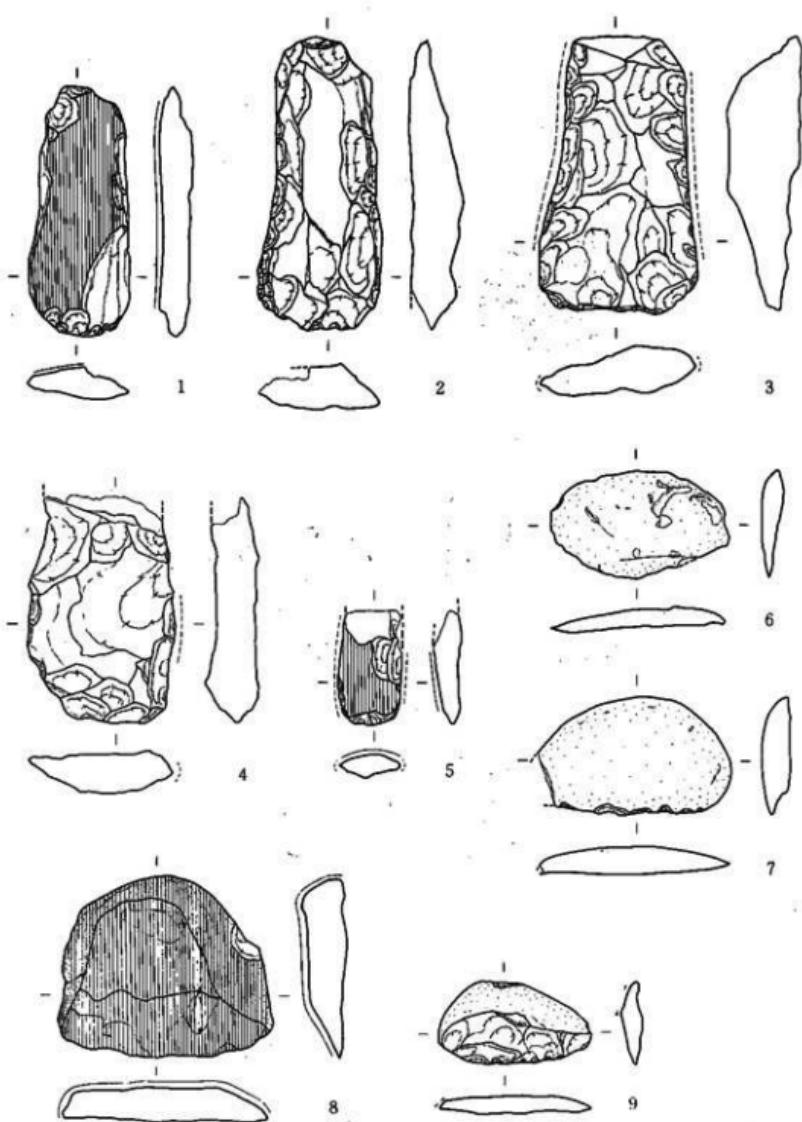
- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 中央道遺跡調査会 | 1975 『中央道調査報告－下伊那郡鼎町その2－』 長野県教育委員会 |
| 鼎町教育委員会 | 1975 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1980 『猿小場遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1983 『矢高原・八幡原遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1984 『鼎町黒河内遺跡』 |
| 鼎町教育委員会 | 1984 『鼎町一色・天伯B遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1985 『日向田遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 『六反畠遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 『日向田遺跡II』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 『田井座・一色・名古熊下遺跡』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1991 『下伊那史 第1巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 『下伊那史 第2巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 『下伊那史 第3巻』 |
| 下伊那史編纂委員会 | 1955 『下伊那史 第4巻』 |
| 鼎町史編纂委員会 | 1986 『鼎町史』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 『物見塚古墳地見学会資料』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 『柳添遺跡現地見学会資料』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 『八幡原遺跡現地見学会資料』 |

四 版

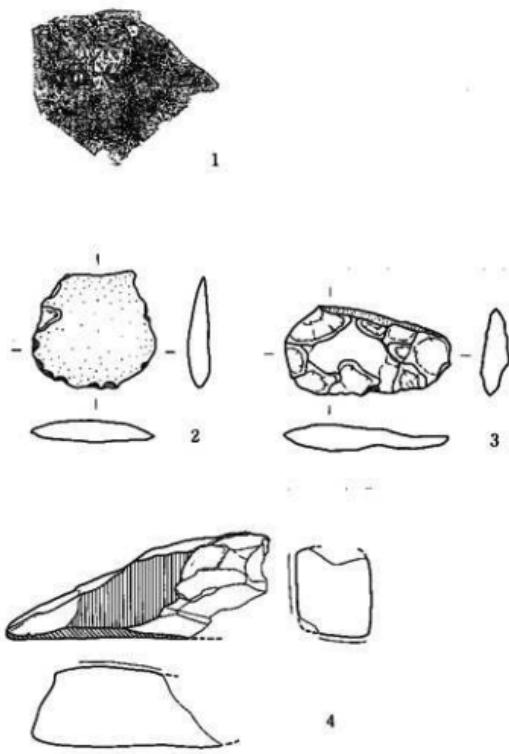


第1図 柱立柱建物址 1、溝址 9、溝址 10出土遺物

(1・2、柱立柱建物址 1 3～5、溝址 9 6～10、溝址 10)



第2図 溝址10出土遺物



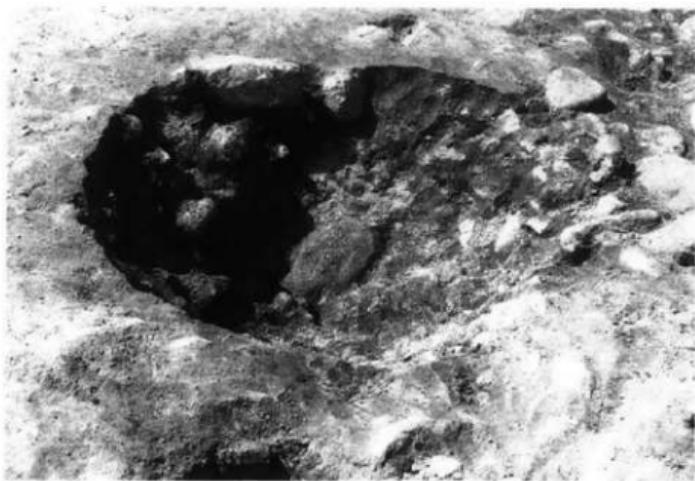
第3図　遺構外出土遺物

写 真 図 版

図版 1



掘立柱建物址 1



土坑37

図版 2



土坑38



溝9（左侧）・溝10（右侧）

図版 3



溝址11（奥）と溝址12（手前）



土坑37付近柱穴群

图版 4

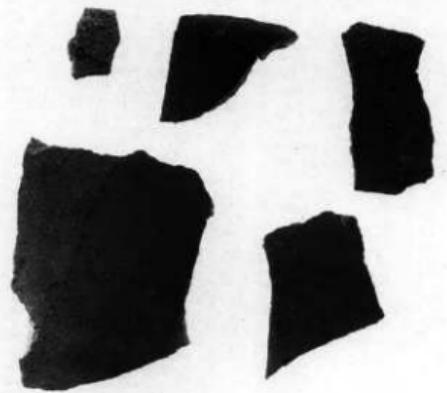
据立柱建物址出土
常滑烧甕片



同 石器



土坑37出土
常滑烧甕片



圖版 5

溝址 9 出土 石器



溝址 10 出土 耳栓



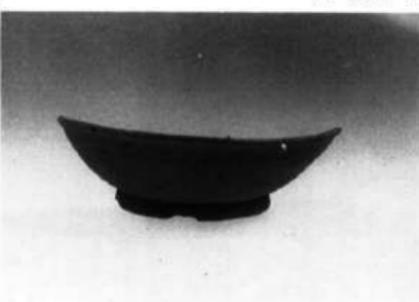
同 長頸壺片



同 須惠器 壺片



同 灰釉 碗



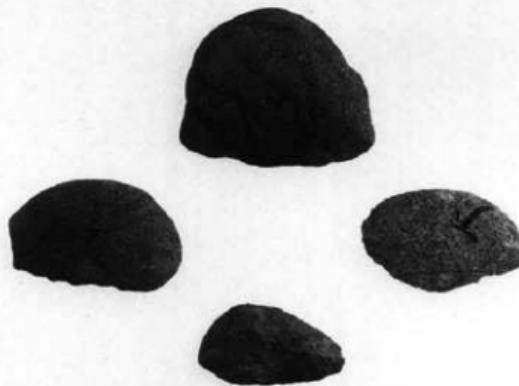
同 灰釉 碗

図版 6

溝址10出土
打製石斧



同 横刃形石器



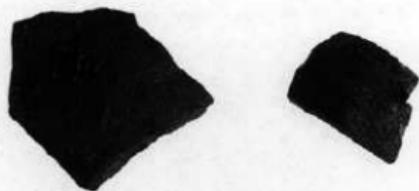
溝址11出土
擂 鍤



溝址12出土
天目茶碗

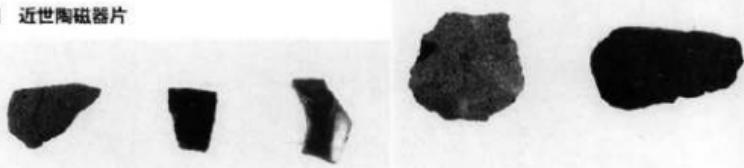
図版 7

遺構外出土
常滑焼壺片



同 横刃形石器

同 近世陶磁器片



同 砥石



図版 8

作業風景



表土剥ぎ



造構掘下げ



測量

猿小場遺跡

都市計画道路飯田下山線建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1992年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
印 刷 株式会社秀文社
飯 市 教 育 委 員 会
